

式辞より・・・(前段省略)

そこで、これからよき社会人として成長していく皆さんへの、はなむけの言葉として「礼儀の意味と儀式的役割」ということについて、お話しをしたいと思います。これはまた、「長く生きた証にできるものが年齢以外に何もない」^{※1}ような人生を歩んでほしくない、そんな思いも込めてお話しします。

先ずこの話から始めます。皆さんは情念という言葉を知っていますか。情念とは人が抱くある種の抑えがたい気持ちのことで、怒り、恐怖、嫉妬、絶望、臆病、不機嫌、そして、愛や、欲望なども指し、有史以来人間をずっと悩ませ続けてきました。その理由は、冷静な判断力や理性を以てしても、情念に対しては無力であり、手も足も出ないからです。

例えば、何かが気になって眠れないといった不安、仲の良くない人に対して、きつとあの人は私の悪口を言っているに違いないという思い込みなど、こうした心の中に付き纏い、頭から離れない気持ち、これが情念です。そしてこの情念に囚われると、拭い去ることができないのです。このことを情念の罠といい、私たちを苦しめます。

情念の罠にかかった経験は誰にでもあるはずですが、自分の心の働きが創り上げた、ありもしない幻想に取り付かれてしまう情念の罠にかかれば、冷静さや理性で抜け出すことは出来ません。喧嘩などは怒りという情念の罠にかからなければ起こるはずもありません。口げんかとなり、ダイアログ^{※2}・対話では解決できないのは情念の罠にかかった証です。

私たち人類はこの情念に長い間、囚われ続けてきました。紀元前から、ある人たちは修行で^{※3}、ある人たちは禁欲主義の哲学で、これを乗り越えようと努力してきました。しかし結局、こうした哲学や修行という方法では、限られた人以外は乗り越えられず、私達のような普通の人間は2千5百年以上、情念に苦しめ続けられてきたのです。

ところが、近年になって心理学が発達すると、彼らは画期的な理論^{※5}を発見し、これによって情念を乗り越えられる道を見つけました。

ある哲学者は、口をおおきく開けたまま、「い」と発音することを思いうかべてみてください。直ぐに分かることですが、絶対に「い」と発音する自分を想像できないはず^{※6}と、こう言うのです。

このことが何を意味するか解るでしょうか。それは、口を大きく開けるという身体の筋肉運動によって想像力が抑えられるということの意味します。

情念はどうやっても自分の努力では消し去ることが出来なかったが、しかし筋肉を動かすことは自分の自由になる。ということは、自由に操ることの出来る身体の筋肉運動によって、ありもしない想像である情念を抑え込むことが出来る、ということになります。実はこれが大発見なのです。

例えばある心理学者は、「腹が立った時にはいつも、手のひらを開け」^{※7}と語っています。いくら怒っていても手を開くと言う筋肉運動くらいは出来ます。その、手を開くという筋肉運動によって怒りという情念を消し去ることができる、と語ってい

るのです。

逆に、ふざけて取っ組み合いを始めた、仲の良い二人の男の子たちが、突如として怒りを覚え始め、本気の戦いが始まる、と言ったことは心理学者なら誰でも知っています。取っ組み合いという筋肉運動によって情念が呼び起こされ、リアルな敵を頭に思い描いてしまうこともあるのです。筋肉運動、つまり行動と情念とは深い関係があるのです。

また、先の哲学者はこんなことも言っています。「我々はほほ笑みなどで不機嫌が治るとは思っていない。だから、ほほ笑んでみようなどとはしない。」^{※8}

「ところが」と、続けてこう言う主旨のことを述べています。礼儀として、私たちは挨拶をするとき、笑顔で行うよう長い歴史の中で習慣づけられてきた。つまり、頬の筋肉をほんの一寸引き上げて、笑顔にするだけで、思考では出来なかった怒りや悲しみなどの情念から、私達を解放してくれる、と言うのです。

挨拶の時のほほ笑みは礼儀です。礼儀は、長い時間をかけて人類が発明し、つくり上げ、そして伝えてきた大切な文化であって、決して決まりやルールではありません。ほほ笑めば相手が、自分にとってどんな存在だろうと、良い関係が生まれることを知り、ほほ笑みを礼儀として取り入れたのです。だからこそ、数千年に渡って受け継がれてきたのです。

礼儀は相手の為に真心をもって行う行為であると言います。であるならば、相手のための真心とは、一体何でしょうか。

これを示唆する話があります。^{※5} 重い病気にかかった患者にお見舞いに来た人が、涙ぐんだ目つきで声を震わせ「あなたを見てると胸が張り裂けそうです」などと言ったら、患者は明らかにその人が自分を見放していると思われよう。また、別の人が、励ますように「元気を出そうよ、きっと良くなるよ」と言ったところで、病人には哀れみの言葉であることが目を見れば直ぐに解る、というのです。情念は必ず外に向けられます。おそらく、両者共に、悲しみや哀れみという情念から離れられない。だから患者に見抜かれたのだと私は思います。

しかし一方、生き生きと生きる喜びを、身体全体を使って患者に語る人が来たかどうか。その喜びはきっと患者に伝わり、生きる希望がわいてくるはずだ、とも言っています。^{※9} きっと、そこには情念のない、真に相手のために思った心、真心があるからだと思うのです。

と言うことは、もし礼儀が相手の為の行為であるのならば、先ず真心をもつことが必要になります。だから先ず、自分の身体に向けて礼儀を正せ、^{※10} 情念を拭い去れ、とこの哲学者は言っています。

では、自分自身に向けた礼儀とはどうすればいいのでしょうか。人類はこれまでの長い歴史の中からこの方法を見つけ出しました。それが礼儀作法です。「礼儀作法の習慣は考え方に大きな影響を及ぼす。お辞儀やほほ笑みと言った動作には、反対の、例えば、怒りや不信や悲嘆を表す動作を出来なくする、という好ましい効果がある。」^{※11}と、この哲学者は述べています。つまり、礼儀の作法に正しく従うこと、これが自分自身に対する礼儀なのだと言うことです。

そろそろ礼儀の意味が見えてきたのではないのでしょうか。礼儀の作法は人類が生

み出した合理的な動作です。つまり、礼儀作法と言う決められた動作に従ってれば、直接情念を支配できるということです。^{※12}強い意志など、礼節や習慣の助けがなければ何の力も発揮できません。

情念に左右されず、時には真心をもつことを可能にし、時には怒りを鎮めて冷静にさせてくれ、時には恐怖を取り除いてくれる便利な機能を、礼儀作法はもっているのです。だから、世の中が、礼儀作法を重んじるのです。この作法によって情念を取り除いてくれるからこそ、人と人の関係が心と心との関係として成り立つのです。そして、儀式は礼儀が連続的、合理的に配置された一つの様式です。その作法、例えば背筋を伸ばす、大きな声で返事をする、礼をする、起立し着席するといった一連の筋肉運動が、参列者に対して礼儀を自然に行わせてくれるし、そのお陰で参列者全員に情念のない純粋な心を創り上げてくれるし、そしてその純粋な心が一つになるとき感動が生まれるのです。これが儀式の役割なのであり、だからこそ儀式は数千年に渡って大切にされてきたのです。

今後皆さんがこの世の中で活躍するためにも、そして情念に振り回されない人生を送るためにも、正しく礼儀の意味と儀式の役割を理解できる「良き社会人」として生きて行ってほしいと願っています。

(後段省略)

令和四年 三月十八日

東久留米市立 西中学校 校長 藪野勝久

- ※ 1 : セネカ (『心の平静について』 p.85)
- ※ 2 : 『ダイアログ』 デイビット・ボーム (p.44-) 一読を薦めます。
ダイアログとは始め哲学者マルティン・ブーバーが、相手ときちんと向き合い人間として尊重することを言い表すために使った言葉です。
- ※ 3 : ゴータマ・ブッダ、後のお釈迦様
- ※ 4 : ストイックという言葉の語源になったストア派と呼ばれる2千年くらい前の古代ローマの哲学者の学派。禁欲主義をその特徴としています。彼らも人間を悩ませる怒りなどの情念に苦しみ、これを哲学で乗り越えようとなりました。セネカ『生の短さについて』『怒りについて』、エピクテトス『人生談義』、マルクスアウレーリウス『自省録』などが面白いです。一読を薦めます。
- ※ 5 : ウィリアム・ジェームズという心理学者で哲学者は、普通、愛する人の死(A)、悲しみ(B)、涙(C)、は、A-B-Cの順と考えるが、彼は、A-C-Bの順、つまり何かが起こると身体に変化が起こり、そのことによって感情に変化が起こると言っています。
だから、ショックがあると涙が出て、だから悲しくなる、つまり泣くから悲しいのです。
- ※ 6 : アラン (『幸福論』 18) より 一読を薦めます。
- ※ 7 : ヴィゴツキー (『教育心理学講義』 p.65)

※ 8：前掲（『幸福論』10）より

※ 9：前掲（『幸福論』58）より

※10：前掲（『幸福論』12）より

※11：前掲（『幸福論』16）より

※12：デカルト（『情念論』50）精神を訓練すれば情念に対して絶対的な支配力をもつことが出来ると言っています。